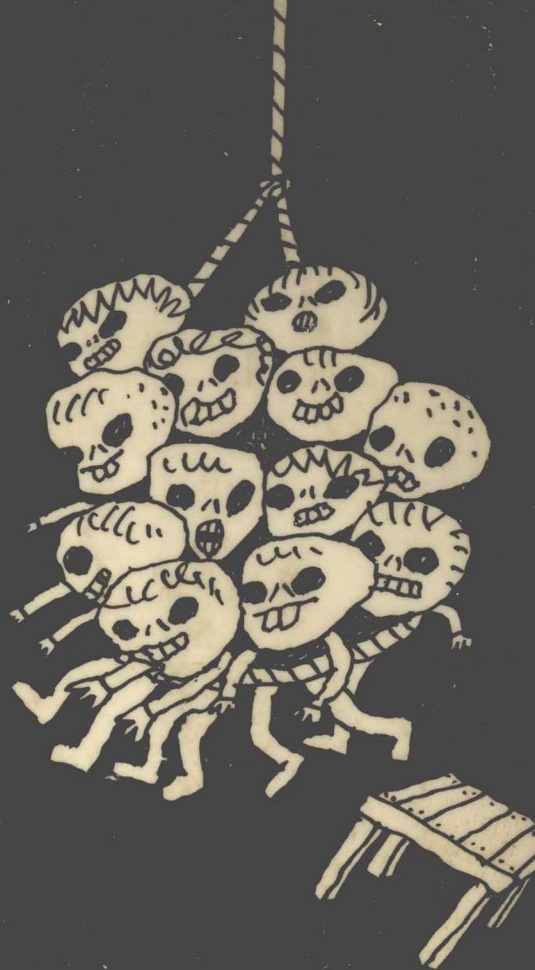


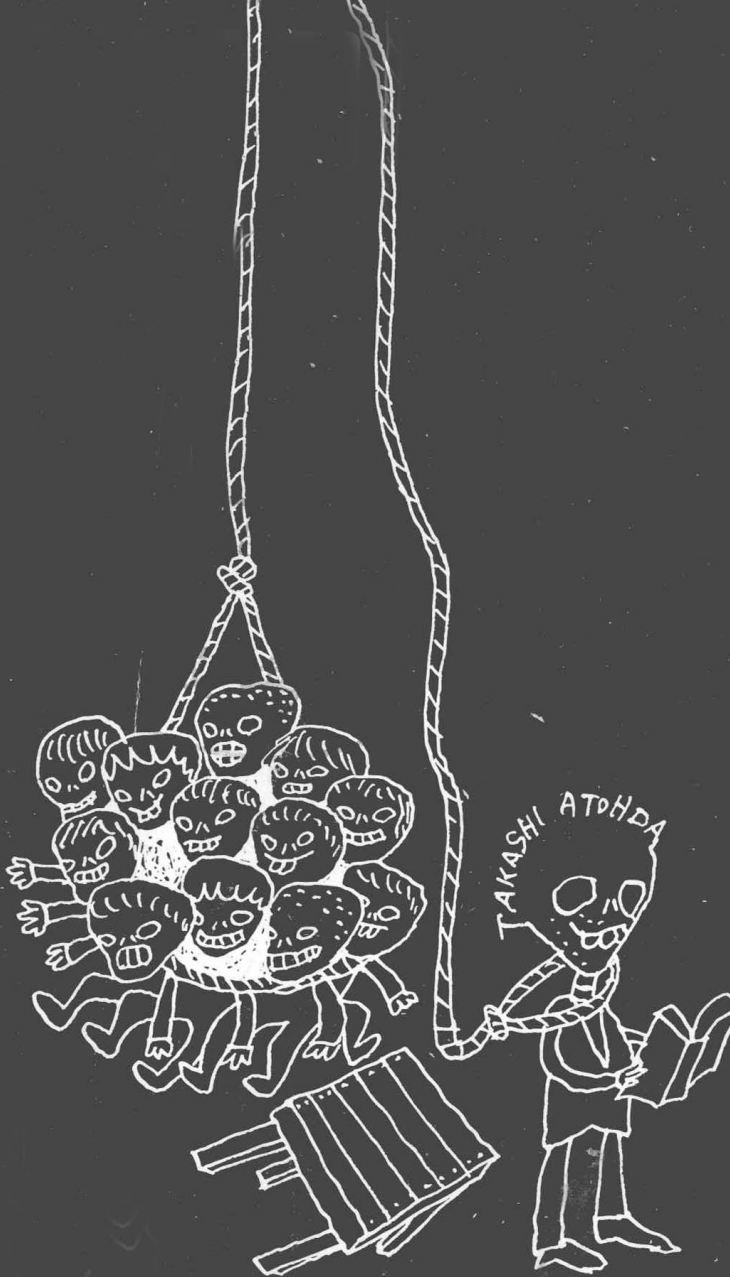
一ダースなら怖くなる

阿刀田 高



ニダースなら怖くなる

阿刀田高



文藝春秋

© Takashi Atohda 1980

Printed in Japan



一ダースなら怖くなる

昭和五十五年 四月二十日 第一刷
昭和五十八年 七月三十日 第十一刷

定価 九五〇円

著者 阿刀田 高

発行者 西永 達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五・一二二一

印刷所 共同印刷

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

一ダースなら怖くなる・目次

妖虫

5

スリランカ^{かたぎ}気質

25

友を裏切るなかれ

47

進化論ブルース

69

結婚嫌い

87

湖畔の女

105

閉じた窓

125

雪うぶめ

145

格子模様の夜

171

女難

193

背後の女

211

青い瞳

237

装幀 長尾みのる

妖

虫



「いわゆる発明発見とは、少し違いますからねえ。工業所有権の範疇には属さないと思いますよ。むしろ農作物の品種改良なんかに近いんじゃないでしょうか」

特許事務所の弁理士は、老眼鏡を上下に動かしながら訝しそうに告げた。まだ事情がよく呑み込めない、といった様子である。

「じゃあ、お金儲けは無理ですか」

田崎昌一は咳込むような早口で問い返した。

「いえ、そうとも言えませんな。本当にこの五匹しかないものならねえ……。そりゃヤツパリ大変なことですよ」

「ね？　そうでしょ」

昌一は顎を振ってひとりウンウンと頷いた。

当然そう来なくちゃあ。

彼は、デスクの上の小箱を撫でながら、いつかどこかで聞いた発明発見のエピソードを心に思い浮かべていた。ある男がバスを待つあいまに小さな針金を指先で捻った。それを細長い渦巻状に巻いたとき、針金が紙挟みとして役に立つことに気づいた。今日私たちがゼム・クリップとして用いているものが、それだった。その男はたったこれだけの発明で巨万の富を手に入れた、と言うではないか。

昌一の発見は充分にそれに匹敵するもの……いや、それ以上のものかもしれない。

弁理士は胸もとで五本の指先を合わせながら、

「たとえば、その虫をタザキムシとでも名付けて、あなたの財産として登録されるわけですね。そうしたところで、利用者と契約を結んでリース業を始めれば、それでよろしいでしょう、おそ

らく」

「リース業？」

「はい、つまり、その……虫を繁殖させて賃貸するわけですよ」

「なるほど。しかし、貸した先でどんどん子どもを生んで、横流しなんかされませんか」

それが気掛りである。

弁理士は大きく首を揺すった。

「いえ、その点は心配ありません。契約条件の中にキチンと盛り込んでおけば……。そりや一部分は横流しされるかもしれませんが。でも、そのくらいはメジやありませんわ。リースの相手は、当然大きな会社とかお役所でしょ。個人的に利用する人が一人、二人いたって、どうってことはありませんよ。さよう、レコードの隣接権なんかと同じようなものでしょう」

弁理士はさすがに専門家らしく聞き慣れない言葉を言う。

客はもう一度首を傾^かげなければいけなかった。

「ほら、レコード会社がレコードを出すでしょう。いったん売り出されてしまえば、それをテープに取って複製するのは簡単ですからね。しかし、無制限にテープ化されたんじや、歌を吹き込んだ人やレコードを作った人は、たまったもんじやない。こりや明らかに財産権の侵害だ。そこでレコードからの複製は禁止されていますし、レコードの歌を営業的に利用するたびに一定の使用料が、歌手やレコード会社のほうに届く仕組みになっているんですよ」

「それが隣接権と言うんですか」

「まあ、そうね。著作権の、すぐ隣にある権利だから、こんなおかしな名前がつけてあるんですよ。どうせ英語からの翻訳でしょ」

「あ、そうか」

「で、テレビ局やラジオ局がレコードの歌を流しているときは、みんな使用料を払っていますし、酒場で聞く有線放送はもちろんのこと、喫茶店で鳴らしているレコードだって原則としては、使用料を払わなくてははいけません。ご存知でしょ？」

「ええ、だいたいは」

「そりゃ個人的にレコードからこっそり複製して使っている人はいると思いますよ。それをいちいち取締まるのは、現実問題として不可能ですからね。しかし、チャンとした組織が利用するときは、しかるべき使用料を払っているはずですよ。あなたの場合も、これと同じケースになるんじゃないですかね」

昌一にも今度は事情がよく呑み込めた。

やはり直感的に判断したことは間違いではなさそうだ。一躍大金持ちになるのも、あながち夢ではないらしい。

奥歯を噛み締め、零れ落ちそうになる喜びを押さえながら、

「いずれにせよ、おたくの事務所じゃこの件は扱えないってことですね」

と、言って椅子から腰を浮かせた。

相手はあわてて手を振った。

「いえ、本来の仕事じゃありませんけど、知合いの弁護士もおります。有能な男ですよ。対策を研究させてみましょう。もしあなたのおっしゃるお話が本当なら……」

と、言う。

昌一はいくぶん顔を強張らせて、

「本日も嘘もないでしょう。あなただって今見たでしょうが」

「ええ、ええ、それはたしかに。じゃあ、早速調べさせてみます。よろしいですね」

「お願いします」

「なにしろ前例のないケースなので」

「秘密は守ってくださいよ。新聞記者になんか嗅ぎつけられたら、ろくなことないから」

「もちろん、ご心配なく。明日こちらからご連絡いたします」

「ああ、そう。じゃあ、よろしく」

昌一は鷹揚に頷いて、弁理士の事務所を出た。

表通りに出たところで、われ知らずピョン、ピョンとスキップを踏んで、小踊りをしてしまった。

「ざまア見ろ」

だれに言うともなく独りごちた。

通行人が声に驚いて振り向く。

彼は睨み返した。

—— 気ちがいだと思うなら、勝手に思えばいい——

みんなドブ鼠色のコートの襟を立て、寒そうに歩いている。どいつもこいつもしがらないサラリマンにちがいはあるまい。二十万円か三十万円か、そんなチツポケな月給のためにせかせか働いている連中ばかりなんだ。

彼自身だって、つい昨日まではそんな男たちの一人だった。

—— だが、今はそうではない——

どうやら途方（ほう）もない好運が舞い込んで来たらしい。

「タザキムシ……か」

インキン、タムシみたいな語感がないでもないが、名前の美的印象などこの際問題ではなかった。むしろ田崎昌一氏所有の虫であると、だれにでもはつきりわかるほうが好都合だった。

「わるくない」

コートの胸に鄭重にていちょう小箱を抱き締めながら道を急いだ。

デパートへ立ち寄り、五匹のタザキムシたちのために、もう少し上等な巣箱を捜してやるつもりだった。

ことの始まりは偶然だった。

世の中には、どこにどんな好運が転がっているか計り知れない。よほど前世の精進しやうじんがよかったのだろう。

その日の朝、田崎昌一はいつもの通り一人住まいのアパートを出た。前夜新宿で遊び過ぎて頭が重かった。

——きのうは楽しかったな——

遊び心がまだ魂のここかしこに残っていた。

駅に向かう道を踏みながら、目がしらに女の顔がちらついていけない。

女の名はエリカ。新宿のクラブGのホステス……。本名ではあるまい。昨夜初めて知り合った。端正な顔立ちだった。

まずポツカリと大きな眼が脳裏に浮かぶ。

いくらか近視なのだろうか。下から掬すくうように見つめられると、真実身も心も吸い込まれてし

まいそうだった。そう……まるで崖のてっぺんから青い海の中を覗くみたいに。

鼻も美しい。稜線はまっすぐに伸びて、ツンと高い。長い髪の毛りと横顔は、とてもこの世のものとは思えない。

——大袈裟かな——

いや、本当の話、そうとでも表現したくなるほどの美しさだった。

頬骨が形よく張り出し、ちよつと受け口の唇だけが生きた人間らしい愛敬を漂わせていた。一転、頬の表情が崩れて微笑むと、その笑ひ顔がまたすばらしい。おそろく欠伸をしたときだって、美しいにちがいない。

顔の美醜を皮一枚の技だなんて、そう言うのはやさしいが、彼はあれほどの美形を今までに身近かに見た覚えがない。

体のほうだって悪くないぞ。ドレスの外から窺ってみてもスリムなボディにチョツと不似合いなほど豊かな乳房が張っていた。乳首はポチンと勝ち誇るように上を向いているだろう。

思っただけで体の芯が熱くなる。

——あんな女を恋人にしたい——

しみじみそう思った。

性格のどこかに不透明な、影の部分がないでもなかったが、アルコールが入ると急に陽気になる。昌一とはすぐに意気投合して、すこぶる友好的なムードだった。

女はしきりに小首を傾げて、

「驚いちゃった。初恋の彼に似てるの」

なんて言っていたけれど……彼女のほうも憎からず思ってくれたにちがいない。

身をすり寄せる仕ぐさにも、帰りのときの握手にも、とても初対面とは思えないほどの真情がこもっていた。昌一はひそかに窺っていたのだが、他の客に対してはけっしてそうではなかった。

——好かれている——

この直感には、こそばゆいような自信があった。

しかし、金のかかりそうな女でもある。

昨夜は大盤振舞いをしたけれど、彼がしないサラリーマンだと知ったら、どう彼女の態度が変わるものか。

——金がほしいな——

今朝はこのほかその感慨が深かった。

いったんは会社へ行く道を歩き始めたが、途中から馬鹿らしくなった。毎日あくせく働いたところで手に入る金は高が知れている。

デスクにすわって課長の醜惡な顔を見たとき、せつかくの昨夜の夢がみんなどこかへふっ飛んで行ってしまふそうだった。

——今夜もう一度エリカのところへ会いに行こう——

財布の中身は残り少なになっていた。

昌一はアパートへ引き返し、預金通帳を握って銀行へ赴いた。

ポケットに現ナマが入ると、さらにまた会社へ行くのが厭になった。

年次休暇は充分に残っている。

ほんの一日、二日でもいい。放恣ほうしな生活を楽しんでみたかった。

それもよからう。

ちっぽけな反逆——まあ、そんなところさ。

足は隣の遊園地に向って動き始め、午前中は釣堀で過ごした。

競艇場が開いているのを思い出し、電車に乗って行って見たが、適中率はあまりはかばかしくない。

最終レースを待たずに競艇場を飛び出し、いつしか川べりの道を歩いていた。

日は西に傾き始めていたが、まだエリカに会う時間は遠い。

冷たい川風が意地悪く心に染み込む。

——会って、どうする？

それと思うと、気分が萎えてしまう。

彼女はホステスになってまだ日が浅い、と言っていた。つい先日まで喫茶店で働いていたらしい。年齢は二十六、七歳。いや、もう少し上かもしれないぞ。どんな半生を歩んで来た女か、よくはわからない。

だれか恋人を求めているような風情だった。

親しくなるなら今のうちかもしれない。

なにしろあれだけの器量だから、今にパトロンがつくに決まっている。土建屋かなにかの、ゴツソリ金を持った男が……。

昌一は靴先でボンと川土手の小石を蹴った。

石は大きく弾んで汚れた水面に落ちた。

西日を受けて油ぎった水面がキラキラ光っている。ゴミの山が川べりに薄穢い風景を広げてい

た。

尿意を催して水辺に降りた。

いびつに開いた牛乳箱の口を狙^{ねら}って尿を注ぎ込んだ。

薄桃色の虫が、三、四……五、五匹ほど這^はっている。

蛆虫かと思ったが、そうではないらしい。むしろ蚕^{かいこ}によく似ている。体長は二センチあまり。彼は腰を振りながらボンヤリと虫の動きを見つめていた。

——こいつら、なにを楽しみに生きているのかな——

ふと不思議なことに気がついた。

虫はヤクルトの壘^うにへばりついている。

そしてサクサクとその容器を噛み込んでいる。

蚕が桑の葉を蝕むように、プラスチックの容器が鋸状に歯を作って減っていく。

「へえー？」

昌一は容器をつまみあげ、虫の口もとをつらつら眺めてみた。

その虫がプラスチックを食っているのは間違いなさそうだ。

初めは容器に染^しみついたヤクルトが、よほどお気に召すのかと思ったが、そうでもないらしい。

ゴミの山に散った、さまざまなプラスチック製品の上に虫を移してみると、相変^{あへ}わらずうまそうに蝕^くんでいる。

昌一の胸が弾んだ。

アルキメデスなら、さしずめ「ヘウレカ」と叫んで、そのまま駆け出したところかもしれない。